

An illustration of a young boy and four young girls standing by a swimming pool. The boy is on the left, shirtless and looking slightly nervous. The girls are in the center and right, some in swimsuits and some in casual clothes, looking towards the boy. The background shows a pool with lane markers and a building.

全裸でプールの  
授業を受けたあと  
クラスの女子全員に  
見られながら  
精通した話

ハメット written by Hammett

おちんちんに興味津々な女子たちに  
ジロジロ見られて勃起がおさまらない！  
女子しかいない更衣室でみんなに  
注目されながらオナニーを披露して  
初めての射精まで見られちゃって……

着衣女子と全裸男子のCFNM小説

体験版

## ■キャラクター紹介

まもる  
真守

ごくごく普通の男の子。ごくごく普通に勉強し、運動し、遊んでいる。

たまに悪ふざけをすることもないではないけれど、まさかそれが今回のような出来事をもたらすことになるとは……。



## りか 梨夏

クラスの女子のリーダー的存在で、男子人気も高い。勉強も運動もよくできて、先生たちからも信頼されている。いつも元気で明るいムードメーカーだけれど、ときどき一部の男子に対してちょっかいをかけることがある。



ことね  
琴音

クラスで男子の人気を梨夏と二分している活発娘。運動神経は学年でもトップクラスで男子にも引けを取らない。さっぱりした性格で誰にでも分け隔てなく接するけれど、ときどきやたらと口が悪くなることがある。



## ゆう 優羽

真守の隣の席の女の子。しっかりしているように見えて意外と抜けている。男女問わず人の世話を焼くのが好きで、尻に敷かれたいと思っている男子も多い模様。



か な  
香 菜

真守が片想いしている物静かな女の子。  
いつもひとりで本を読んでいることが  
多く、ひそかに憧れている男子は少な  
くないけれど、みんな遠慮してなかな  
か声をかけられずにいる。



震える足で飛び込み台にのぼると、  
真<sup>ま</sup>守<sup>もる</sup>はプールサイドに体育座りをして  
並んでいるクラスメイトたちを見下ろ  
した。

心配そうな顔、同情するような顔、  
おもしろがっているような顔、恥じ  
らっているような顔——さまざまな表  
情が自分を見上げているのを目の当た  
りにして、七月の強い陽射しのせいば  
かりではなく、頭がくらくらしそう  
だった。

「はい、ふたりとも。手は横にしてまっ  
すぐ立つ！」

クラスメイトたちのうしろで腰に両  
手をあてて仁王立ちしている五年二組  
担任の小<sup>こ</sup>牧<sup>まき</sup>彩<sup>あや</sup>子<sup>こ</sup>先生が、厳しい声を飛  
ばしてくる。

真守は思わずビクッと肩をすくませて、隣の飛び込み台に立っている弦也げんやのほうへ目を向けた。

弦也もちらっと真守を見ると、「仕方がないさ」とでもいうように大人っぽく片眉など上げて見せて、股間を隠していた両手をあっさり離してしまった。

「わっ……」

「マジで……？」

押し殺したざわめきがクラスメイトのあいだに広がる。

それもそのはずだろう。

なにしろ弦也はいま全裸で、それまで必死に手で隠していた性器を、ついに夏の太陽のもとにさらけ出してしまったのだから。

(ちょっとふざけてて授業に遅れたからって、いくらなんでもこんな……)

両手で股間を押さえながら、真守は

泣きそうな思いで弦也をうかがう。

覚悟を決めた弦也は強かった。

ついさっきまでもじもじしていたのが嘘のように、もはや堂々と胸を反らし、クラス全員にペニスを見せつけるようにしている。股間をさらしていることを別にすれば、いつもの何事にも物怖じしない弦也そのものといった風情だった。

(くそっ、弦ちゃんだってやったんだ……だったらオレだって……)

なにも言わずにこちらを睨み据えている小牧先生の視線にびくつきながら、真守もおそるおそる股間から手をずらし、ついにクラスメイトたちのまえでペニスをあらわにしていった。

(あああ……！ やっちゃった、見せちゃった……！)

震える手を身体の横でそろえて、真守も弦也を見習って背筋をまっすぐに

伸ばした。

そのとき力が入りすぎたのか、勢いよく腰を前方へ突き出すような格好になってしまい、むきだしの陰茎がぷらんと小さく揺れて弾んだ。

「やだあ……」

女子たちのあいだにクスクス笑いが広がる。

一方で男子たちは一様に視線を落とし、自分が辱めを受けてでもいるかのような無念の表情を浮かべていた。

(ああ……<sup>か</sup>香菜<sup>な</sup>ちゃんにも見られちゃった……)

ひそかに想いを寄せる彼女は、体育座りの両膝に腕をのせ、そこへ顔を伏せるようにしながらも、あきらかにちらちらと真守と弦也の股間へと目を向けているのがわかった。

(そんなに見ないで……！)

ぐっと拳を握りしめた拍子に、ぷら

ん、おらん、とペニスが左右に揺れ動く。

「ちんぶらこ～、ちんぶらこ～……」

誰かが低い声で言った直後、女子たちがいっせいに爆笑を始めた。

「あはははは！ やめて！ おなか痛い！」

「ぐふっ、ちんぶらこっ、ぶふっ、ふふふっ……！」

「やーだー！ もーやめなっただあ～……ぷっ、くすくすっ……」

女子たちはさもうれしそうに哀れな男子ふたりのペニスを眺め、指さして、容赦なく囃し立てる。

さすがの男子連中も同情よりおかしさが勝ったと見えて、みんな自分の膝のあいだに顔を突っ込んで肩を震わせていた。

そんななか――。

「あっ、見て！」

よく通る声が女子たちの嬌声を一瞬にして静まり返らせた。

声の主は、いつも女子たちの中心にいるリーダー的存在の梨夏<sup>りか</sup>だった。

「ねえ、あれ勃ってきてない？」

梨夏の指は、真守の股間にまっすぐ向けられていた。

「えっ」

「えっ」

「えっ」

それまでどちらかといえば女子人気の高い弦也のほうへ注目が集まりがちだった視線が、そこでいっせいに真守の股間だけに集中した。

(えっ)

真守もまたびっくりして、自分の股間を見下ろした。

(わっ、わっ、わっ、ちょっと待って……)

極度の羞恥と緊張のなか、なぜか真

守のペニスは徐々に力をつけていて、ぐ、ぐっ、と先端をゆっくり持ち上げはじめていた。

「えっ、なにあれ」

「勝手に動いてる」

「ボッキっていうんだよ」

「うわあ～、エロだ～」

好き勝手なことばと熱気のこもった視線を方々から浴びせられながら、真守の陰茎はぐんぐん硬度を上げ、角度をつけていって、ついには亀頭を青空に向けて完全にそそり勃ってしまったのだった。

「うわ、うわっ……」

「すご、あんななんの……？」

「初めて見た……」

クラスの女子全員から凝視されて、真守のペニスはビクッ、ビクッと身をしながら脈を打ちつづけている。

「こらあっ！」

そこで、いまさらのように小牧先生の怒声が轟いた。

「どうしてちんちん勃てるの！ 早く戻しなさい！」

男子たちのあいだに祈りのようなうめきが渦を巻いて、女子たちはさらに声高く笑いはしゃぐ。

「ほら、ちんちん戻して！」

そんなふうに言われると、よけいに勃起を意識してしまう。それは真守自身ばかりでなく、女子たちにしても同じに違いなかった。

「ね～、戻しなよ～」

最前列からこちらを見上げている梨夏が、にやにや笑いながら声をかけてくる。

（おまえ……！ 元はといえばおまえが言い出さなきゃ誰も気づかなかったかもしれないのに……！）

歯をくいしばって睨みつけるも、梨

夏は「こわっ」と口先で言うだけで真守の勃起から視線をはずそうとはせず、おもしろそうに観察を続けている。

「ねー、授業始めらんないじゃん。早くそれなんとかしてよ」

梨夏の隣から声をあげたのは、いつもなにかと小うるさい<sup>こと</sup>琴<sup>ね</sup>音だった。

「てかキモいんだけど。せめて弦也みたいにおとなしくさせとけよ」

そう言われ、ハッとして弦也を見る。

弦也は我関せずといった涼しげな顔つきで、最前と変わらぬ気をつけの姿勢を保っていた。ペニスはず常時のままで、やたらと姿勢がいいことに真守は理不尽な怒りをおぼえた。

（オレが注目集めてるから弦ちゃんは無事なんだからな！）

心のなかで叫んでも、まったくむなしばかりである。

「はいはい、静かに！」

いよいよ收拾がつかなくなりかけてきたとき、ようやく小牧先生が派手に手を打ち鳴らしてみんなを静かにさせた。

「ちんちん戻るの待ってたら日が暮れそうだし、このまま授業を始めます！とりあえずふたりとも、あなたたちのせいで授業の始まりが遅れたことをみんなにちゃんと謝ってください！」

小牧先生に促されて、弦也がすかさず頭を下げる。

「迷惑をかけてすみませんでした」

弦也に注目が集まったのは、ごく一瞬のことだった。

次は真守が謝るのだろうと全員の視線がすぐにこっちへ集中してきて、当然また勃起したままのペニスを容赦なく見られてしまう。

「ご、ごめんなさい……」

みんなの目から逃げようとするみた

いに顔を伏せ、ぼそぼそ声を落とすのがせいいっぱいだった。

「はい！ それじゃあふたりとも、降りてきて列に並びなさい！」

ようやくこれで解放されると思いながら、真守はプールサイドに降り立った。女子と男子の列のあいだへ歩を進めると、梨夏がひょいと首を伸ばして、すぐ横から間近に股間を覗き込んできた。

「まだ全然なおってないじゃ〜ん。そんなんで授業できるんですかあ〜？」

「ほんとキモい。さっさと戻せよクソが」

やたらと口が悪いのは琴音である。そのわりに梨夏の隣から身を乗り出すようにしているのは不思議だったけれど。

「やめなよ。そんなこと言ったらよけい戻らなくなっちゃうかもしれない

じゃん」

この春から隣の席になった優羽<sup>ゆう</sup>が、同情的な意見を述べてくれている。しかし、せっかく最近仲よくなってきた優羽にまで恥ずかしい勃起を見られてしまっていると思うと、そんな気遣いも逆にいたたまれなかった。

「はあ？ あんたあいつのチンコ見れてうれしいんじゃないの？」

「なっ、なんでそうなるの！ あたしはそんな——」

声を荒らげながら膝立ちになった優羽の横を、真守がちょうど通り過ぎる。

「あっ……」

優羽は目線の高さを通り過ぎていく真守のペニスを熱っぽく凝視しながら見送ると、それ以上はなにも言い返さず静かにまたお尻をプールサイドに落としてしまった。

列の最後尾までのわずか三メートル

ばかりの距離が、ひたすら長く感じられた。

そしてその最後尾では、あまりしゃべったことはないけれど四年生のころからずっと気になっていた香菜が座っていて、ちらちらとこちらを見ているのだった。

(香菜ちゃんみたいな子でも……ちんこに興味あるのかな……)

見ないように見ないようにとしている姿が、逆に関心の強さを物語っているように思えてならない。

現に横を通り過ぎるときなどは、両手で目を覆いつつ、その隙間から大きな目を覗かせてまっすぐに勃起へと視線を注いでいた。

「さっさと水泳パンツはいて戻ってきなさい」

いつのまに列のうしろまで移動していたのか、弦也が小牧先生に言われて

そそくさと更衣室のほうへと向かう背中が数メートル先に見えた。

そのあとを追いかけてやろうとすると、すかさず小牧先生が進み出て行く手を阻まれた。

「あの……？」

真守がこわごわ見上げるより早く、小牧先生は素早くその場にしゃがみ込んで、ずいっと股間に顔を近づけてくる。

「全然おさまってない」

鼻息のかかりそうな至近距離から直視されて、勃起が勝手に何度も跳ねる。

「これがおさまるまでは水着なしで授業を受けること。わかった？」

「えっ……」

「わかった!？」

「はっ、はいっ……！」

そして結局、真守の勃起は五時間目が終わるまで少しもおさまらず、その

日はたっぷり一時間、クラスでただひとりペニスをさらけ出したまま水泳の授業を受けることになったのだった。

♂

「やっと終わったと思ったのに……」

長い長い一時間をようやく乗りきった真守だったが、あいかわらずペニスはむきだしのままで、勃起状態も依然として継続していた。

「まあ片づければ解放されるんだしさ。さくさくやっちまおうや」

「弦ちゃんはフルチンじゃないからいいけどさあ……」

ふたりは授業に遅れた罰として、教室へ戻るまえにビート板やらヘルパーやらの片づけをしていくようにと小牧先生に言いつけられてしまったのだ。

男子連中は校庭でサッカーをするた

めにさっさと引き上げてしまい、よりにもよって女子ばかりが何人か、プールサイドに残って隅のほうで小牧先生をまじえておしゃべりになど興じている。

(なんか見られてる気がするんだよなあ……)

少し距離があるので話す声まではしっかり聞こえないけれど、ときどき笑い声があがって、そういうときに思わず振り返ると、女子たちがいっせいに顔をそむけるように思えたのだ。なぜか小牧先生も含めて。

「じゃあ俺、これ戻してそのまま着替えにいっちゃうから。まもち先生に報告しといて！」

「えっ、待ってよ弦ちゃんっ」

「悪い、このあと日舞あるからさ！」

勢い余って足をすべらせそうになる弦也に、

「走らない！」

と目ざとく小牧先生が気づいて怒声を飛ばしている。

ぽつねんと取り残された真守が途方に暮れる思いで小牧先生のほうを振り返ると、先生も、周囲をとりまいている五人ばかりの女子たちも、じっとこちらを見つめていた。

(なんなんだよお……)

思いっきり注目を浴びながら、真守は手ぶらチンぶらの状態で小牧先生の元へと歩いていった。

「終わったので戻ります」

少し離れた位置から声をかけると、

「え？ なに？」

小牧先生は耳のうしろに手をあてて、わざとらしく顔をしかめる。

「いや、だから……」

「ここまで来て報告しなさい！」

「えええ……」

絶対に聞こえてただろと思いながら、真守はしぶしぶ小牧先生のすぐそばまで歩を進めた。

「終わったので戻ります」

それだけ言って踵を返しかけると、小牧先生に両肩をつかまれ、正面を向かされた。

「ちゃんと反省した？」

「しました」

すぐにでも逃げ出したいのに、がっしりと肩を押さえつけられて、身動きがとれない。

「なにを反省しましたか」

「え……あ、授業に遅れたことです」

周囲で女子がクスクス笑っている。全員の視線がまっすぐ勃起に注がれているのをはっきり感じた。

「ほかには？」

「ほかに……あ、だからふざけてて、そのせいで授業に遅れて……」

「ほかに」

「え……っ……」

小牧先生の視線がペニスに向けられていることに気づいて、真守は目を泳がせた。

「あの、だから、こんなふうになって、それもごめんなさい」

「こんなふうって？ なにが、どんなふう？」

ビクンツとペニスが跳ね上がる。

「やだあ」

「くすくすっ……」

真守はだんだん苛立ってきた。

小牧先生も小牧先生だけれど、まわりのこいつらはなんなんだ。

香菜ちゃんや、優羽——まあ、あとは梨夏も琴音も顔はかわいいからまだいいけれど、べつに好みでもないしろくに話したこともない女子たちにジロジロ見られて笑われるなんて、さすが

に不愉快きわまりない。

「だから！」

やけっぱちで真守は叫んだ。

「こんなふうにしんこを！」

ぐわしっと勃起を驚づかみにして、先端を小牧先生につきつけた。

「みんなのまえで勃起させて！」

周囲の女子ひとりひとりにも、順番に先っぽを向けて威嚇する。みんな「やっ」とか「ひっ」とか、小牧先生まで「そんなっ」などとうろたえている。

「全然おさまらなくってごめんなさい！」

勢い余って何度かそのまましごいてしまってから、真守はハッとして手を止め、

「もう戻っていいですよね!？」

と小牧先生に食ってかかった。

「アッ、ハイ、ドウゾ」

裏返った声で言いながら小牧先生が後ずさる。

真守は一同を思いっきり睨みつけてやってから、のしのと大股で更衣室へと向かっていった。フルチンで。

つづきは製品版で  
お楽しみください

# ■サークル「破滅乱淫オーガズム」作品一覧

\* 2026年7月現在

## ◎既刊

---

- ① 委員長・静井莉子の露出自慰日記  
～優等生のカゲキないキぬき～
- ② ロリのふりして脱法露出！  
合法ロリでも外で脱いたら違法です！！
- ③ 露出体験告白1 イキすぎた公開絶頂
- ④ 着衣女性×露出男性 勃起見せつけ体験集1
- ⑤ 時間停止能力を手に入れて露出オナニーを満喫したら人生終了しちゃった話
- ⑥ 露出体験告白2 痴女たちの全裸淫戯  
(『全裸になりたいわたしたち 露出体験告白2』改題)
- ⑦ 身動きできない満員電車でロリたちに勃起を勝手に出されて射精させられた話
- ⑧ イメージビデオに出演したら挿入がないだけでほぼAVみたいな撮影だった話
- ⑨ 着衣女性×射精男性 勃起見せつけ体験集2
- ⑩ イトコのねーちゃんに女湯で射精させられて家でエロいことしまくった夏の話
- ⑪ 露出痴女図鑑
- ⑫ 女の子が勃起チンポを見てくれるだけの本【JK編】
- ⑬ 露出絶頂体験 街で、オンライン会議で、混浴温泉で……
- ⑭ 露出体験告白3 公然のイキ恥さらし
- ⑮ わいせつイメージビデオ出演の元アイドル少女の行方について
- ⑯ ピンサロで遭遇した愛娘に生フェラされながら手マンしてイカせてしまった話

- ⑰ Kカップ人妻（38）、不倫露出で破滅確定
- ⑱ 全裸でプールの授業を受けたあと  
クラスの女子全員に見られながら精通した話

## ◎近刊

---

- \* 女の子が勃起チンポを見てくれるだけの本【ロリ編】
- \* 国民的清純派女優・浜瀬架帆  
本気のセックスを映画として上映するため彼女は女優になった
- \* 男は誰もがチンポの虜 兜合わせ体験集
- \* 怪淫譚 心霊絶頂体験集
- \* 娘がアダルトライブチャットをしていたので  
エロirikクエストをしまくった話

(近刊の発売順は変更になる場合があります)

★各電子書籍ストア、ダウンロード販売サイトにて発売中！

(ストア、サイトによっては規約の関係上、  
一部扱いのない作品があります)